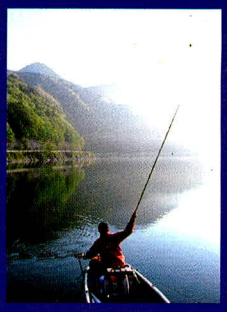
No.463
2004 Jul
7

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna Contents

「へら鮒」の題字/叶 九隻



●今月の表紙●
angler：生井澤 聡
field：西湖
photo:本誌・大場勝良
layout：本誌・田中里史

4 **西湖総力特集** 夏だ西湖だ前浜だ根場だ！

第一部 戸張 誠&田辺哲男 「野釣り道場」+「それってどーゆーことよ!?」in 前浜

第二部 生井澤 聡、爆釣ゲーム in 根場

137 **3カ月連続 夏の緊急特別企画** 桜井呑舟 オカメ釣りの真髄Ⅰ

COLOR（カラー）

21 名手・石井旭舟がいく、へら鮒出会い旅… へらぶな浪漫街道
《第十九回》偉大なる田瀬湖。

27 戦い続ける男、浅草へら鮒会、年間タイトルへの挑戦。小池忠教 激闘の軌跡
《第4戦》5月例会:西湖・精進湖

33 生井澤 聡&山中いつ子の佐原水郷の四季
《其の7》延方水路で大型を狙う

40 棚網 久 あなたの夢を叶えます。
《第4回》巨べらを釣らせて2 （芦ノ湖） ゲスト:小山隆司さん

46,146 原始釣人・稲毛利夫&貧果釣人・モロちゃんの純野釣り探求記！ アタリをちょーだい!!
《Vol.7》後高沼／川越大沼／川越小沼／新沼／走り沼（埼玉県小川町／嵐山町）

118 こだわりの店 黒べゑに「一文字」さん来店！

120 竹とともに生きる。
《第11回》「忘我」作者 森田吉信

123 杉山達也のSPLASH BEATⅢ
《Vol.4》鬼怒川大自然、メーター両ダンゴで210枚・73.7kg!!

130 熱血釣り女・吉川ひとみがいく！「へらってヤバイわっ!!」
《第25回》浜野H.Cで自己記録を更新せよ!!

134 第8回 椎の木湖杯

142 西日本川釣り紀行 北川穂積
《第19回》円山川（兵庫県）

177 岡田 清 Deep Side Angle
《Vol.10》【スーパーナチュラル・バイト】

FIELD PHOTO REPOAT
182 三名湖（埼玉県）
184 柴山沼（埼玉県）

186 釣りクラブ見参！
睦へら鮒会（清久大池）

188 新連載 本音で迫るへら用品インプレッション。へらアイテムメッタ斬り！
ラフトジャケット〔マルキュー㈱〕&銀閣テントPro.〔㈱スノーピーク〕

190 新連載 編集部が独断と偏見で選ぶナイスなお店 釣りの帰りに寄りたいお店
《file.1》司食堂のカツ丼（山梨県河口湖町）

192 フィッシングレディ
《今月のレディ》宮嶋幸子さん 大作のセキ（千葉県）

MONOCHROME（モノクロ）

50 今月の要チェックフィールド 編集部

★エリアレポート
52 筑後川本流&宝満川（福岡県） 河口正伸
54 薬勝寺池（富山県） 山本一朗
55 甲南へらの池（滋賀県） 前田誠志
56 佐屋川寄せ場（愛知県） 後藤 誠

58 あらいしのぶの始めてみようよ、へら鮒釣り
《第15回》春の乗込み特別企画 しのを野釣りに連れてって♡2 印旛の野池

62 トーナメンター小林恭之が挑む！ 竿頭までぶっ飛ばせ!!
《第7回》バリバスカップ関東予選 野田幸手園

66 NHCスピリット
《Vol.10》最強女性アングラー佐々木近恵 in羽生吉沼

73 江成公隆のトーナメンター、復活への道。
《Vol.25》撃沈「一歩進んで二歩下がる」

82 そんなモジリにダマされて… 天野正由
《その7》大河迷走マブナ1匹 相模川

88 水辺のプラネタリウム 吉本亜土
《今月の星空》「砂漠の水辺2」

93 元気が出るへら鮒 西田美明
《第19回》「日焼け止めクリームで真っ白」の巻

98 最狂ヘラ戦士養成所"鮒の穴" 高橋謙司
《第十八話》しのちゃんに純野釣りで貴重な1枚をゲッチュ～♡させよ！

102 野田幸手園新聞

104 ワクワク管理釣り場情報

108 小売店情報

150 竹竿&合成竿で未開の釣り場を楽しむ！ オデコバンザイ!?
《その7》矢作の水路&野池（茨城県岩井市）

154 トピックス 鵜の大群!!

★へら鮒BOX
155 里ちゃんの新米編集長雑記
156 情報発信基地
158 ボイス
164 コラム『夢中と書いて夢の中』伝道師P
165 新コラム『日研だより』日研広報部長・遠藤克巳
166 新コラム『へら狂おやじと呼ばないで』白石和弘
167 バリバスカップ関東予選
168 NHCへらぶなトーナメント第1戦、第2戦／クラブ対抗へら鮒釣り選手権大会関東予選1
169 がまかつへらぶなチーム対抗戦 西日本大会
170 竹竿倶楽部「水凪」春の大会
171 羽生吉沼 賞金100万円へら鮒釣り大会
172 釣果予想クイズ
174 プレゼント発表
175 広告索引
176 編集後記

STAFF

●Producer
根本百合子

●Editor in chief
田中里史

●Editor
大場勝良
諸冨一秋
伊藤小百合
伊藤洋一

●Planner
〈オフィス・えふ〉
藤原 肇

この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆のトーナメンター、復活への道「一歩進んで二歩下がる!?」

〈Vol.25〉
撃沈

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web連動企画！ 《URL》http://hesar.yokohamatsurumi.net

メジャートーナメントの予選シーズンが開幕した。今年も各地で熱いドラマが展開されることだろう。江成にとっては、ほぼ10年ぶりに迎えるシーズンとなる。記念すべき再起第一発目の予選は、「バリバスカップへらトーナメント2004」関東予選 in 野田幸手園だった。結果は写真の表情からお察しいただけるだろう。目の前の厳しい現実に、呆然とする江成…。
釣れても釣れなくても目立ってしまうのは、メディアに載る者の宿命。貧果だけでも十分なのに、参加者中一番目立っていたそのヘアスタイルが、輪をかけて参加者達の「笑い」を誘っていた…。一回戦撃沈後、熾烈な二回戦を遠目に見ながら、江成は黙々と竿を振り続けていた。自身の明日のために…。(←どっかで見たフレーズだナー)
大会の取材を終えた後、里は江成にどう声をかけてよいのか悩んだが、思い切って釣りをしている江成のそばへ寄ってみた。
「江成さん、今日はお疲れ様でした。次回は期待してますんで、これにメゲずにがんばっ…あ？　アニキ、何やってんスか？」
「え？　何って釣りだよ、釣り」
「んなこたぁ分かってますよ！　なにダンゴなんかやってんすか！　セットの練習じゃないんスか！」
「いいじゃないの～！　イレパクだよイレパク！　里ちんもやんなよ。おんもしれーぞぉ！」
…江成はただの釣りバカだったようだ。
江成のたっての希望でサブタイトルを変更した。「一歩前へ！」は一年も持たなかったことになる。里がせっかくつけたのにぃ！　…冗談はさておき、新しいサブタイトルを見る限り、江成は何くわぬ顔で竿を振りながらも、その実かなりこたえていたようだ。
今だから書けるが、里は江成にちょっぴり期待していた。もしかしたら予選を通過してしまうんじゃないか、と。そう思ってしまうくらい、里はすっかり「江成ワールド」にはまってしまっていたのだ。
「あと少しだけ釣行回数を増やす事が出来たなら、引き出しをスムーズに出し入れ出来るのに…」
江成の一ファンとして里が常々感じていることだが、編集長という立場に立てば、その言葉は飲み込まざるをえない。なぜなら今回は「コケて良かった」からだ。仮に江成があっさり予選通過してしまっていたら、今まで築きあげてきたリアリティが台無しになってしまうところだった。一般読者と同じ釣行ペースで栄光の舞台を目指すところに、この企画の意義があった筈。多くの読者から共感が得られたのも、まさにそこなのである。もし通過してしまっていたら、「やっぱり普通の人じゃないから通るんだよ」と言われるのがオチだ。確かに江成の知識と過去の実績は、一般レベルを遥かに超えている。だが、結果がついてこなければ「タダの人」に過ぎない。「普通じゃない人」・「とってもうまい人」なら、なにも江成の連載である必要はない。「へら鮒」ではすでに多くのスターに登場していただいているからだ。
今回江成は、現在の自らを「タダの人」だと証明してみせた。これから出す良い結果には、読者も心から拍手を送ってくれるに違いない…。

by 里ちん

ラッキーチャンス。

以前、「全国大会に出られるだけで満足だった」と書いたが、地区予選に対しては「参加するだけで満足」とは思っていなかった。その気になれば誰だって出られるんだから当たり前だが、今振り返ってみると、「自分は当然、予選を通過出来る」と思っていたように感じる。だから「参加する事に意義がある」なんて、これっぽっちも思ってはいなかった筈だ。
あちらこちらで、「釣りの幅を広げていく過程で自分の釣りが壊れていった」と書いてきた。言い換えれば迷いが増えたために選択を誤りやすくなったという話だが、迷っているようではまだまだ道の途中という証拠なのだ。もし本当にレパートリーが増えていたとしても、自分がやりたい（好きな）釣りと選択すべき釣りのけじめがつかないようでは、ただの勘違い野郎でしかない。また、技がホンモノであれば、時には誰も選択しないようなその釣りでぶっちぎれるかもしれないが、残念ながらそういう話はあまり聞かない。正攻法どうしのぶつかり合い。ほんのちょっとした部分のせめぎ合い。そこから逃げてしまっていては、トーナメントで勝機は薄い。たとえそれが一発勝負であってもだ。
僕が自信満々だった当時というのは、浅いタナでの勝負が多かった。しかし、その釣りを選択出来る場所を引き当て続けていたという事を見落としていた。つまり「運」。いかにも自分の実力だけで予選を突破してきたように錯覚していたが、くじ運も良かったんだと気が付いた。やりたい釣り方が数少ない手持ちのカードの内の一つでありながら、その釣りを出来る場所にちゃんと座れていた自分。当時、僅差で敗れようものなら「運がなかった？　いや、実力！　…だけど、あそこでフラシから1枚逃げなければ…いやいやもっと釣ればよかっただけだ！」などと頭の中で堂々巡りをしていた。運がなかったと片付けていては進歩がない。そういう意味では間違った思考回路ではな

いが、その前提が間違っていたようだ。当時の僕は運がないどころか、めちゃめちゃ運が良かったのだ。今回よーく分かった。もちろん今回のトーナメントでは、「くじ運さえ良ければ通れたのに」とは全く思ってはいないが。

96年の「へら鮒」1月号に、僕の書いたジャパンカップ全国大会レポートがある。後の「エンジョイフィッシングレポート」へと続いていくことになる原稿だが、久しぶりに読んでみるとなかなか面白い事が書いてある。まず「幸運にも二度も予選を通る事が出来た」という記述が僕の目を惹く。こりゃウソだろう。謙遜しているだけで、今書いたように当時は「当然通過」と感じていた筈。

もうひとつ面白い発見。「悔しさよりも、修行が足りない気分」と書いてあるが、文全体を見れば結構悔しがっている印象を受けた。「全国へ出られるだけで満足」もウソかもしれない。「出るからには勝ちたいが、自信は無い」のをごまかすために、自らについたウソ…。

バリバスカップ予選。

数多くの友人に恵まれ、僕は本当に幸せ者だと思う。「バリバスカップの予選に出る」という予告を5月号でして以降、昔の釣り仲間から連日のように幸手園の情報がもたらされた。こんな事を言っては罰が当たるが、あまり情報が多いと迷ってしまうものだ。しかし皆の見解はほぼ一致していたので助かった。それはどんな釣りでも釣れなくはないが、ひとつに絞るとすればやはり、「バラケにウドンで浅いタナ」というものだった。この当たり前過ぎる釣り方に、読者の多くはなんの驚きも持たないだろう。けれども僕にとっては、現在のトーナメントシーンを象徴する「暖季の固形セット」は初挑戦に近い。仮免ももらっていないのに、いきなり高速道路に放り込まれたような気分。弁天でメロった僕は、タナ規定の有無という差こそあれ「いいおさらいになる」、いやいや「リベンジに絶好のチャンスだ」と、自分を奮い立たせた。「北城理論」の底釣りも、実はかなり気になってはいたのだが…。

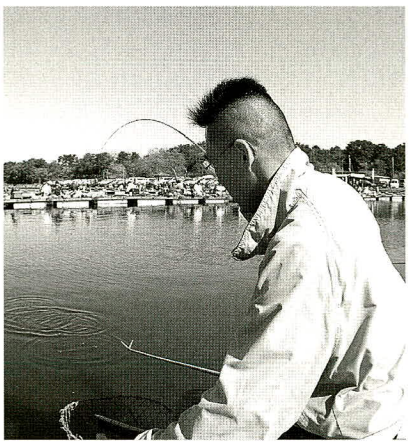
バリバスカップの一回戦は並びの10人が一組となり、二人が二回戦に進める。桟橋によって状況にムラがあったとしても、並び10人ならばそんなに大差はないだろう。公平ないルールだと思った。トーナメントではどんなに悪い場所を引いてしまったとしても、与えられた場所でベストを尽くすしかない。どうあがいても上位は望めないと感じてしまったとしてもだ。他の競技者のことを思えば、くさって試合を放棄するわけにはいかない。大会の士気を下げるわけにはいかないのだ。その点、バリバスカップは気が効いている。「ベストを尽くす」が「一回戦通過」にイコールとなる可能性が高いからだ。残念ながら、二回戦では「運」の占める割合が大きくなる。一気に人数を絞るため、10人一組とはいかない。桟橋の端と端では世界がまるで違う可能性があるが、時間的な制約もあるのでなかなか難しい問題である。ここは、「運も実力の内」と割り切るしかない。

さて、僕の一回戦。隣はなんと、伊藤宏二氏。あの伊藤洋一氏の弟さんだ。実力はお兄さんと互角か、それ以上という噂も聞く…。同じブロック内でのポイント的な差はなくとも、他のメンツがどうなのかは、やはり「運」ということになる。

同じ桟橋の突端では、あの岡田君と萩ちゃんが同ブロックだった。とんでもなく家賃の高いブロックに、他の8名は戦意をそがれてしまったかもしれない。自分のブロックに話を戻すと、他にも有名な方がちらほら。さらにチーム「自作自演」の本多俊行君まで…。しかし負けるわけにはいかない。伊藤氏と世間話をしながらも、僕の目は三角に吊り上がっていたと思う。

一回戦終盤、僕も伊藤氏もアタリの少なさに閉口していた。後ろ向きはアタリっきり。場所を外したことは明白だった。しかしバリバスカップの一回戦は、外した場所でも通過出来るルール。実際に並びから二名は通過出来るのだ。渋い中でも接点を見つけ、我慢してボツリボツリとカウントを重ねていった選手が通過していった。終了後、伊藤氏とミニ反省会。一言で言えば、「後ろ向き」のような落ち込み地合を追ってしまった二人だが、伊藤氏は氏の持ち味を出し切って敗れた。何の悔いもないはずだ。僕は「イマのセットは渋っても落ち込み！」という思い込みが強過ぎた。僕の釣りには状況判断もなければ確信も信念もなかった。

伊藤氏のご友人が、一回戦終了間際に底釣りを試していた。あっと言う間にイレパク…。僕が底釣りを選択していたとしても同じように決められる保証はないし、朝から釣れたかどうかも分からないが、これは正直ショックだった。しかしこれから先の長い道程を考えた時、「バラウドン」は避けて通ることが出来ない必須科目。「アマくない」ことが分かっただけでも「良し」とした。



ディープサイドアングル。

先月号の岡田君の連載記事で、先々月号の内容の訂正があった。こういうことはあまり聞かないし、あったとしても翌月の記事の片隅にちょこちょこっと載るくらいなものだろう。いや、そのまま素通りすることが普通かもしれない。しかし里ちんは違った。里ちん自身の誤解をネタに、全編に渡って訂正を繰り広げたのだ。「岡田 清の真の姿を伝えたい」。その誠実な姿勢に、敬意を表したい。で、読み終えて僕はハッとした。「僕も彼をセットの講師と呼んでいるし、しょっちゅう登場人物として名前が出てくる。僕の記事でも少々説明が必要なのではないか?」と。

僕の連載開始直後のセット編で、岡田君は僕にこう説明している。

「長めの下ハリスとゼロではないが甘めのバラケで、遠巻き（もしくは上方）のへらを追わせて釣る」

先月号のディープサイドアングルでは、

「なるべく短いハリスで、タナにいるへらを反応させて釣る」

と、接近戦を強調している。

接近戦を成立させるには、不用意に上からバラケを開かせることは出来ない。「タナを作る」という意識が必要になってくる。これは里ちんも記事の中で触れているが、この二つのコメントは全く相反する。いったいどういう事なのか。よく読んでもらえれば気付いていただけると思うが、前者のコメントは、僕の「イマドキのセットとはどんなものなのか?」という問いに答えたものであり、実は「岡田 清のセット」ではない。僕の記事の中で岡田君はこうも言っている。

「今でもタナを作るというイメージは大事」

「ナジませた方が（地合が）続くと思う」

つまり、落ち込みなりのタナの凝縮は必要という事になる。さらに、「落ち込みセット＝速攻ではない。タナに入らないからやむを得ず」とも。では、へらがタナにいる場合、もしくはやりようによっては「入れられる」場合、岡田 清が狙うのはどこか。言わずもがなである。本人のたゆまぬ努力と、パートナーである本多作のチューニングに次ぐチューニングの成果が、彼自身一度は諦めかけたタナへの誘導を再び可能にしたのだ。ハシャがせ過ぎず、かといって抑え過ぎず、へらをなだめるように丁寧に丁寧に誘導していく様は、エサ付けの際の彼の集中力から容易に想像出来る。「岡田 清にとっての追わせるという要素」は、落下中に食わせることが第一ではない。あくまでもタナへ誘導するための要素なのだ。岡田君が常用する完全な落とし込みでは、ある程度の水深に達するまで仕掛けは張らない。ウキで動きとして見られ

るのは、「タナでの追い＝反応」がメインになる。冷静に考えれば、これは「普通の」ナジませ釣りではないか？　オモリがナジみ切った後の、そこから下のハリスが落下中のアタリが、現在「速攻」や「落ち込み」と認識されているか？　10年前ならエサの重さが完全にかかりきるまでは、「ナジミ際の釣り」のバリエーションとしてとらえる人もいたかもしれない。しかし、ぶら下げて動きが止まってからの釣りを「ナジませ釣り」とは、誰も定義していなかった筈だ。故・藤田東水名人も、「ナジんで一発取り」と表現していた。

大型化が進んだ現在、へらは薄くなった。多過ぎてウキを立たせられなかった時代に比べれば、「ナジませる」ことは易しくなった。しかしそれは見かけ上の話だ。ウキがすんなりナジんだところで、タナにへらが溜まって来なければ何の意味もない。「強引に押さえ付けること」さえ出来れば「追える」活性の高いへらだけを選別する事になり、自動的にタナが出来上がった時代とは違うのだ。

バリバスカップの数日後に、僕は岡田君の記事を読んだ。真似をするのは容易ではないが、勇気はもらった。で、さっそく反省のやり直し。バリバスの一回戦は、活性が低過ぎて上からの反応も少ないことから必然的に待ち釣りだったが、結果として丁寧に「入れ」て、少しでもタナでの密度を高める釣りだったことに変わりはない。もう少し「以前の自分のスタイル」を再確認してみよう…。

G杯地区予選。

バリバスカップから2週間後の5月9日、僕はG杯南関東地区予選に出場した。ここまで読んで、僕がG杯では当然「バラウドン」を選択したと思う読者が多いだろう。情報でも最も多くの参加者が選択してくるであろう釣り、すなわち正攻法が「浅ダナでのバラウドン」だった。ただしかなり難しいというオマケの情報付き。それでも僕は、もちろん真っ向から勝負するつもりだった。5月3日、NHCで羽生吉沼へ行くまでは…。

バリバスとG杯の間に、今年一回目のNHCへらぶなトーナメントが行われた。僕の成績は大したことはなかったが、セカンドステージでの深宙のウキの動きが頭から離れなかった。並んだミスターG氏と交互にイレパク。「隣の吉沼だって同じようなもんだろ。丈五テンテン快楽釣法で決まりっ！」（そんないい加減なことでいいのかよ…）。

G杯予選は加須吉沼で行われた。使用するのはもみじ桟橋。一回戦と二回戦に分かれるが、合計重量を競うために途中でゲームオーバーとはならない。一発逆転の可能性があるルールと言えるが、そんなものは夢でしかなかった。

朝、マルキューフィールドテスターの小柳康秀氏と10年振りに再会。聞けば氏も丈五天上で勝負するという。狙いは同じだ。ちょっと安心。抽選を終え、釣り座を確認しに行く。一回戦の釣り座、水深3・7m…。

一回戦。底スレスレが気に入らなかったが、予定通り丈五テンテンで勝負。へらの気配はすぐに出たが、一向にアタリにならない。裏向きの小柳氏もボヤいていたが、開始から1時間経った頃から事態は好転。一気に釣り込んでいった。僕のところは2時間経過後に、やっと釣りらしくなってきた。それまでたったの1枚。残り1時間でどれだけ拾えるか。それによって二回戦がいくらかは楽になる。しかし釣りらしくなってきたどころか一気に寄り切ってしまったと呼べるウキの動きに、頭がついていかない。当然だがエサも全く別のものになってしまっている。ようやく口の中にハリを入れることが出来たのは、終了30分前のことだった。そこから7枚を追加して僕の一回戦は終了。厳しい状況に立たされてしまった。だが最後の最後にやっと掴んだ感覚をそのまま二回戦へ持ってくることが出来れば、一発大逆転は大いにあり得る。

二回戦。一回戦と同じ釣りをしたかったが、丈五を出してはオモリベタになってしまう。浅すぎるためにテンテンの地合はつかないかもしれないと感じた僕は、「底」も視野に入れて丈三を継いだ。道糸を詰めて長いハリスを結び、ナジんで下バリが底につくかどうかというセッティング。つまり「底いら辺釣り」である。一回戦のエサ感を利用しつつ、ウケを出し切れないようなら底で待とうという都合のいい作戦。悪く言えば究極の中途半端。一回戦でこの場所に入った吉田康雄氏が底でコイをかけており、完全底釣りをためらわせていた。

結局はこれが裏目に出る。予想通り、テンテンらしい「ウケっきりでチャッ」とか「アタってアタってドカン」という動きにはならなかった。宙層での厚い寄りはなかったのだ。そのかわりに、想像以上にへらは底についていた。完全底釣りに変更したいが、もっとハリスを伸ばさなければ両バリとも底につかない。しかし上から追わせる必要がない以上、もっともっと詰めたいぐらいなのだ。仕掛けを作り直す気になれなかった僕は、仕方なくハリスをさらに伸ばした。あまりハリスが長いとテンションが抜けやすい。アタリが出切っていないと感じた僕は、重いしっかりしたエサに換えた。が、イマイチだった。何やってんだか…。

一回戦で僕と同じ向きの参加者達は、どんな釣りでもパッとしていなかった。水深だけでなく、そのマス自体に問題があったのかもしれない。なので水深4・6mで丈五テンテンという僕の選択についての判断は、とりあえず保留にしておく。

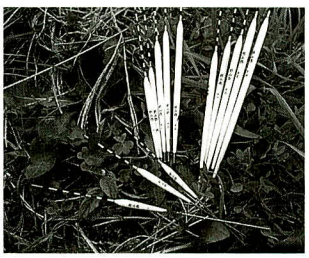
反省すべきは二回戦だ。確かに僕の入った場所は浅かったが、トップを狙う釣り方が選択出来ない場所だったかと言えば、それはノーだ。二回戦では、へらは満遍なく回遊していたように感じる。ただ僕がやりたい釣りを選択出来なかっただけなのだ。二席隣で浅いタナを釣っていた天笠 充氏の釣果を僕が出せれば、一回戦の貧果を補って予選通過する事は可能だった。もちろん僕が浅いタナをやっていれば通過出来たと言っているわけではない。冒頭に書いたように、「けじめ」のつけられない今の僕には予選通過は有り得ないということなのだ。いや、もしかすると底釣りも「ない釣り」ではなかったのかもしれない。しかしいい加減なセッティングで釣り通してしまった僕は、「ベストを尽くした」とは言い難いのだ。

優勝は前出の小柳氏。2位 茂木昇一氏、3位 天笠 充氏と浅ダナセットが続いた。皆、「自分の釣り」を信じて押し通した人達だった。

競技派からのんびり派まで、すべての釣り人に使って欲しい…

へら浮子 杉山作

浅ダナスタイル
【パートⅠ・パートⅡ・ワイド・ムク】
（各1本4,500円）
フリースタイル
深宙スタイル
（各1本5,000円）



取り扱い店〈五十音順〉
埼玉・越谷 かわせみ（☎048・969・5067）　茨城・下妻 こやの釣具（☎0296・44・1619）　東京・渋谷 サンスイ川釣り館（☎03・3499・5025）
埼玉・入間 三水堂つり具店（☎042・964・2093）　栃木・益子 フィッシングハウスほその（☎0285・72・2215）　神奈川・川崎 鮒仙人（☎044・287・7470）
東京・吉祥寺 丸勝（☎0422・22・8923）　東京・青梅 吉川釣具店（☎0428・22・2467）

くやしい気持ち？

G杯予選の表彰式を待つ間、古川 実君と喋った。

「平均レベルが高いですよね、今は。江成さん達がやってた頃は、突き詰めてる人ってそんなに多くなかったじゃないですか。でも今はみんな研究してますよねぇ。短バリスなんてのも、もうみんながやっちゃってるんですよ。そんな中で他人と違うモノを見つけだしていかなくちゃ勝てないんですから…。至難の業ですよね。僕も見事に落ちました（笑）」

あの古川君でさえそうなのだ。僕が通過できるわけがない。

皆が研究している中でも、釣る人はいつも釣る。時代が変わっても、それは変わりない。やはり何かを掴んでいるのだろう。里ちんは、以前の僕を「悠々とメジャー予選を突破していった」と感じたそうだが、バリバスとG杯の両方を通過していった茂木氏に、今度は僕がそう感じたのだ。氏の釣りを一度も拝見したことはないが、色々な話から独自の世界を持っていることは知っている。噂では、今流行の「顆粒バラケ」のオリジネイターとも聞く。一度お話をしてみたいと思う。

おっと、里ちんで思い出した。彼はちゃっかり4位で予選通過していたのだった。釣り方は8尺天上ウドンセットというコスイ（？）釣り。いや、冗談はともかく、考えてみれば、里ちんだって今はほとんど釣りに行けてないのだ。境遇は僕とかなり似ている。いや、それ以上かもしれない。ったく、10年前はカワイイ学生さんだったのに、近年はメジャー予選を何度も抜けているのだ。

「10年前、ジャパンカップの予選で君が僕を熱い眼差しで見つめていた思い出の加須吉沼で、見事に僕を置き去りにしてくれましたね。帰り道は感慨深いものがあったぞ！　おめでとう！」

いつも釣りの後は本当に寂しい。帰れば日常が待っている。

「こんなに楽しい遊びなのに、明日はもう仕事かよ～！　そうです。それが現実なのれーす！」

極端な性格の江成。これまでの現場結びから一転、バリバスカップ、G杯では、数百本単位のストックが！　昼休みに食事もとらず、少しずつ結んだらしい。気合いの程が窺える…。
使いやすいのか使いづらいのかはよく分からないが、とにかくコテコテにカスタマイズされている江成のハリスケース。使用済みスプールを使うのはグッドアイデア。
スプールに見える「TurboⅡ」は、江成が現在もモニターを務める「フジノライン」の製品だが、ハリスケースに収まっているのは非売品。新製品発売にあたり、モニター全員にテストと同時にデザインも募集したことがあったらしいが、これはその時に江成が考案したもの。モノクロでは伝わらないが、デザインは江成好みのレインボー柄。当然、「却下」…だったに違いない。

…ちょっと待て！　以前、江成は「モニターなんかやめちゃえばいいんだよ」と言っていた筈だ。釣りを全くしなくなっていた時期もあったというのに、現在もモニターを引き受けているモノがあるとはどういう事なのだ？　これは問いたださないわけにはいかない！

里：アニキ！筋が通らないですよ、筋がっ！「縛られるくらいならやめちゃえ」って言ってたじゃないっスか！

江：あぁ、そうか。でもフジノラインさんはなんにも縛らないもん。そりゃあ自分でも他メーカーの糸を使おうという気は起きないけどさ。今回バリバスカップに出るのだって全然気にしなかったよ。フジノラインさんにお伺いをたてるなんて事は考えもしなかったけど。…これってマズかったのかな？　モニターってそういうもんなの？　バリバスカップの大会規定にも、他メーカーのモニターは出場禁止だなんて書いてなかったと思ったけど…。

里：うーん、ものすごく微妙な質問しますねぇ…。まぁ、メーカーによって扱い方も呼び方も違うでしょうし、個人ごとにどういう契約形態なのかでも変わってくるんでしょうけど…。一般的に金銭面での契約はないという状態の方を「モニター」と呼ぶのであれば、メーカー側の立場としては本来、お願いして協力していただくというものだと思います。ところがこの業界では「モニター」にステイタスを見い出してしまう方が非常に多かった時期があり、モニターになりたい方が後を絶たなかったんですね。ですので、もしかするとその辺を勘違いしているメーカーさんもあるのかもしれませんねぇ…。

あっ！　もう！　本題からズレてますよっ！釣りをしない時期でもモニターを続けていたってのはどういう事っすか！「ふまつげん」は釣りしないからって辞めたくせに…。

江：グッ…！　それはねぇ、オレもずっと気にしてきたんだけど、ズルズル来ちゃったんだよね。それは何でかっていうことを一度考えてみた事があるんだけど、地元神奈川のメーカーっていうのが大きいかな。オレそういう地元の繋がりっていうのに弱いんだよ。もの凄く仲間意識を感じるわけ。

里：はぁ…？

江：それに釣り仲間の藤野和範君の親戚の会社だし、自分に出来る事があれば何でもやりますぜぇ！って感じ。そうは言ってもたいしたことは出来なかったからねぇ…。数年前に「何度も辞退しようと思いながら、ここまで来てしまいました」って伝えたんだけど、「じゃあ辞めてくれ」とは言われなかった。だから今も続いてるんだよね。でもまぁ結局、自分からハッキリと「辞めます」とは一度も言ってないんで、ズルいことはズルいわけだけどさ…。

里：そうだったんスかぁ。

江：もちろん製品にも愛着はあるよ。特に不透明の白系の糸は他にはない独特のもので、眼が悪い俺には見やすくて最高だね。あと、綺麗なデザインのウキも白いキャンバスでこそ引き立つってもんでしょ？　トンボとかゴム管とか松葉なんかの色でも遊びやすいっていうかさ。俺、昔のアップル社の6色りんごマークが好きだけど、あれだってモノトーンの匡体の中のワンポイントだからいいんだよね。俺がいくらレインボー好きだからって、全体がレインボーなグッズには全然触手が伸びないんだよ。分かる？色付きの道糸に何色のトンボを結べばいいか迷っちゃうじゃない？

里：ハァ？　別に迷いませんが…。

江：そう？

（江成に聞いた里がバカだったのかもしれない…。以下、㈱フジノラインからの正式なコメントです）

●　●

㈱フジノライン営業　兼松氏のコメント

江成さんには10年来「フィールドテスター」をお願いしております。江成さん自身釣りから離れた時期もあったようですが、当社といたしましてはフィールドテスターの方々に広告塔としての意味だけを求めてはおりません。よりよい製品づくりのために真面目に協力していただける方で、何より「釣りをよく知っていらっしゃる」ことが第一なのです。専門誌で連載を持っていらっしゃるとか、各種トーナメントで立派な成績を出していらっしゃるとかいった要素は、もちろん参考にはさせていただきます。江成さんも、以前は（笑）各種トーナメントで活躍されておりましたので、フィールドテスターをお願いするに相応しい方の候補としてお名前が挙がったという次第です。

江成さんお気に入りの「不透明の白系」という色についてなのですが、実は着色濃度と製品強度のバランスをとるのが非常に難しいのです。白に限らず、本来異物である顔料の濃度が高まれば強度低下も起こりやすくなり、特に淡

そんな事を思いながらハンドルを握っている事が多い。しかし今回は少し違った。それは「悔しい」という気持ち。実力もないのにおかしな話だが、戦う以上は持つべき闘志だと言えなくもない。それを確認できた僕は、少しだけ嬉しくなった。

しかし、家に着き、子供の顔を見ると、今度は途端に申し訳ないという気持ちになってくる。ムシのいい話だが、せっかくの休日を独りで使ってしまった後悔。それくらい子供は愛しい。

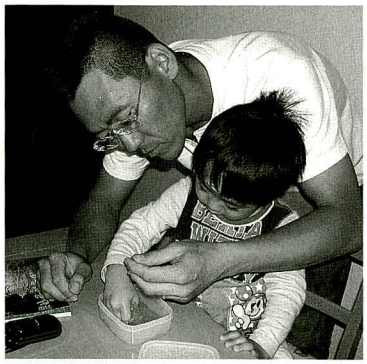
僕の仕事にゴールデンウィークは関係ないが、その近辺のほとんどの休日を釣りに充てた。というより釣りにあわせてシフトを組んでもらったので当然なのだが、かなり無理をしてしまった。犠牲になったのは僕の家族だけではない。G杯予選は、職場にも町内会にも嘘をついてまで参加した。この日はどうしても仕事を休めない「ハズ」の特別な日だったが、「町内会役員が町内運動会に出ないわけにはいかない!」とぶっちぎった。住まいと職場が近いので嘘がバレないかどうかヒヤヒヤだったが、その近さが幸いし、近隣地域への協力なら仕方あるまいという事になった。運動会は本当の話で、町内会へは逆に「どうしても仕事を休めない事情」を説明して逃げ切った。予選当日の朝、うしろめたい気持ちなど全くない程釣りに気持ちが向いていたが、やっぱり神様は見ているもんだと思った。いやもちろん、日頃の行いが悪くなかったとしても、今度は実力で予選を通れないのは分かっているが…。結果が悪かったから感じるだけなのかもしれないが、つかの間の釣り三昧を後悔。これ以上のスケジュールはありえない。試釣なんてもってのほか。やっぱりトーナメントは無理かなぁ…と、かなり萎えてきた。

ここで「もう俺には無理だな」と言って諦めるのは簡単。連載も「書けない」と断れば済む話だ。里ちんだって困るのは1号分だけだろう。代わりは幾らでもいる。

しかしそれでは応援してくれている読者の皆さんに申し訳ない。あれだけ一生懸命になってくれている里ちんだって、男として顔向けできない。

月イチ釣り師の代表ヅラをしておきながら、このまま引き下がるわけにはいかないのだ。

そうだ! それこそが僕の家族に示すべき大義名分というものだ!?



水用の細号柄では断面積が小さい分、その影響を受けやすいのが現状です。以前ある釣具店さんから「色付き糸は弱い」と言われ、「白系」以外の製品までまとめて返品されてしまった事もありました。

確かにマット系の色付き糸が弱いというのは定説で、特に白系は弱い傾向にあります。製造技術の向上により強度低下が抑えられつつあるものの、やはり強度重視であればクリアー系となります。現在メインの「鮮SEN へら道糸」のホワイトに関しましては、従来品より着色濃度を落としています。「白系」のラインは特にデリケートなので、保存にも気を遣っていただけるとよいのですが、それではお店でディスプレイ出来ませんから(笑)。ナイロンラインというものは当社の「白系」に限らず、蛍光灯の光でも劣化は進んでしまうものなんです。

個性の強い商品は好みがハッキリと分かれてしまうのですが、江成さんのように熱狂的なユーザーもいらっしゃるのは事実なんです。当社といたしましては、これからもフジノファンの皆様の期待を裏切らないような製品作りをしていく所存です。

【現在の主力製品】
鮮SEN へら道糸(0.4〜2号) カラー:オレンジ/ホワイト
60m平行巻 オープンプライス
剣KEN へらハリス(0.2〜1.5号) カラー:クリアー
60m平行巻 オープンプライス
HGへら 道糸(0.4〜1.2号) カラー:ブラウン
50m巻 ¥2,700-
HGへら ハリス(0.15〜0.6号) カラー:クリアーグレー
50m巻 ¥2,700-

@江成が愛用するラインは「アイスブルー」(写真右手前)。正式な商品名は「TurboⅡ」のアイスブルーカラーだが、その独特なカラーから、色の名前で呼ばれる希有なラインだ。熱烈なファンに支えられ、今も製造が続く逸品である。

お問合せ
釣具関連業者様、個人の方からの個別のお問合せにつきましてはE-mailのほか、お電話・FAX・お手紙などでも受け付けております。
〒243-0041 神奈川県厚木市緑ヶ丘5-4-17 株式会社 フジノライン 電話046−223−6875 FAX046−224−4070
E-mail info@fujinoline.co.jp URL http://www.fujinoline.co.jp
釣具店で商品入手が出来ない場合、通信販売を行っております。1ヶから受付ておりますのでお問合わせ下さい。
カタログをご希望の方は返信用切手160円分を同封し、「カタログ希望」と明記の上お申し込み下さい。

釣番付

料金表

50名まで	55,000円
51名〜75名	60,000円
76名〜100名	65,000円
101名〜125名	70,000円
126名〜150名	75,000円
151名〜175名	80,000円
176名〜200名	85,000円

・仕上がりは黒一色です
・人数は成績表部分のみ数えます

書体見本

1.ぐりへら鮒会
2.ぐりへら鮒会
3.ぐりへら鮒会

・番付をインターネットで公開できます(無料)

お問い合わせご注文はお早めに!

取扱店:柴 舟 03-3613-2727

ウキや小物の銘入れに

転写シール

初回注文黒一色、300銘で8,500円〜
2回目以降同じものをご注文の場合は3,500円〜

・8書体、8色を御用意しています
・角印も作れます

取扱店:
柴舟(東京都江戸川区) 03-3613-2727
佐伯釣具店(神奈川県川崎市) 044-911-3722
SANSUI川づり館(東京都渋谷区) 03-3499-5025
フィッシング中原(神奈川県川崎市) 044-711-8266
鮒仙人(神奈川県川崎市) 044-287-7470

お問い合わせ、ご注文は各取扱店または下記HPまでどうぞ

office27
あとりえぐり

http://www.office27.com
E-mail:info@office27.com

平成16年7月1日発行（毎月1回1日発行）　第39巻 第7号
昭和41年5月4日第三種郵便物認可

へら鮒釣りの楽しさを追究し続ける…

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna

No.463
2004 July
7

夏だ西湖だ前浜だ根場だ！

西湖総力特集

戸張 誠＆田辺哲男が挑む、藻面の底釣り徹底解明！

「野釣り道場」＋「それってどーゆーことよ!?」in 前浜!!

唸る「龍聖」200枚！　豪快、溶岩地帯の深宙！

生井澤 聡、爆釣ゲーム in 根場!!

3カ月連続
夏の緊急特別企画

●「角麩段差釣り」の達人、ついに明かす！

桜井香舟 オカメ釣りの神髄Ⅰ

トーナメントシーズン真っ盛り！
管理釣り場爆釣連載

杉山達也：SPLASHBEATⅢ
鬼怒川大自然、メーター両ダンゴで210枚・73.7kg!!

岡田　清：Deep Side Angle
羽生吉沼、深宙両ダンゴで83枚・48.42kg!!

新企画

●本音で迫るへら用品インプレッション。
へらアイテム メッタ斬り！

●編集部が独断と偏見で選ぶナイスなお店。
釣りの帰りに寄りたいお店

昭和41年5月4日第3種郵便物認可
第39巻第7号（毎月1回1日発行）
平成16年7月1日発行

戸張誠は「ペレ道」を選んだ。

二〇〇三年優勝の原動力。

その釣りは、極めて正統的。
その技は、すべてが熟練の
新しさや派手さとは無縁
非凡な勝負強さを備えた
戸張誠。名門・関東べら
昨年の年間優勝者。
そんな彼が、野釣りでの威力を
勝負を賭けたのが「ペレ道」だ。

戸張誠　2003年関べら戦績

1月	横利根川	16.4kg	13位
2月	横利根川	5.6kg	17位
3月	豊英湖	36.0kg	8位
4月	丹生湖	58.0kg	1位
5月	西湖	54.2kg	1位
	前浜　15尺底 「ペレ道」1＋「ダンゴの底釣り冬」1.5＋「バラケマッハ」1＋水1		
6月	精進湖	39.5kg	1位
	村浜沖ロープ　16・18尺宙 「ペレ道」1＋「グルバラ」1＋「バラケマッハ」1＋水1		
7月	精進湖	36.6kg	3位
	大割れロープ　21尺宙 「ペレ道」1＋「段差バラケ」1＋「グルバラ」1＋水1		
8月	精進湖	35.2kg	1位
	大割れロープ　21尺宙 「ペレ道」1＋「段差バラケ」1＋「グルバラ」1＋水1		
9月	豊英湖	31.6kg	7位
	竹ヤブ　18尺宙 「ペレ道」1＋「グルバラ」1＋「バラケマッハ」1＋水1		
10月	戸面原ダム	21.2kg	4位
	中島岬　21尺底 「ペレ道」1＋「ダンゴの底釣り冬」0.5＋「バラケマッハ」1＋水1		
11月	三島湖	38.0kg	3位
総重量	372.3kg	年間順位1位	

勝者を支えたダンゴエサ。野の底・宙に、大活躍。

以前、本誌で戸張が語ったように「ペレ道」には「適度な比重があるため、深場での釣りや、風や流れのある状況にも対応できる」「練り込んでも開き、寄せる力が強い」「ハリ切れがよく、早いアタリを積極的にアワセても時合が崩れにくい」などの特長がある。実は、野釣りにも抜群なのが「ペレ道」なのだ。

●ペレ道　スライダーチャック袋

つれるエサづくり一筋
マルキュー
本社・桶川工場　埼玉県桶川市赤堀2－4　〒363-8509
TEL：(048) 728－0909(代)　FAX：(048) 728－3909
大阪支店　大阪府寝屋川市楠根南町12-14　〒572-0811
TEL：(072) 824－0909(代)　FAX：(072) 825－0909
四国営業所　香川県坂出市西大浜北3-4-33　〒762-0053
TEL：(0877) 44－0909(代)　FAX：(0877) 44－3909
九州営業所　佐賀県鳥栖市姫方町341-8　〒841-0023
TEL：(0942) 82－0909(代)　FAX：(0942) 83－0909
マルキューホームページ → http://www.marukyu.com/　釣り場でエサに困ったらiモード → http://www.marukyu.com/i

定価　一〇〇〇円　本体九五二円

雑誌　07907-07
4910079070742
00952